



町民文芸

只見短歌会

四月詠草

大塚栄一

指導

にこやかに挨拶くれし人の名を思ひ出せず寝るまで惑ふ

馬場 八智

新型のコロナウイルス報道に心痛深く終息願ふ

関谷登美子

スマホ見つむその目は徐々に細くなり園の休みの孫は眠りぬ

新国由紀子

入学も卒業式もままならず新型コロナ感染止まず

渡部ゆき子

鍬入れの時期近づくに柄の緩みし農具をしばし水に浸しぬ

目黒 富子

この春の車の往来少なきはコロナ感染の影響ゆゑか

渡部ヨリ子

子等のため心張りつめ励み来し日も遥かにてくちなし白ふ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

五月定例会

目黒十一

指導

群れを引く鴨大らかに羽ばたけり
山裾は雑木と果てし部落跡

礼

何気なき日々に価値あり初桜
十年の樹木となりて梅白し

修一

野仏や花栗の香に酔ひ給う
草刈り機路の一叢残りけり

幸生

凛として荒れたる庭に薔薇一輪
颯爽と新入社員が闊歩する

信

春の炉に何とはなしに手をかざし
学びやに休校くり返す春の空

都

カーテンの隙より見ゆる朧月
春雷や気持ちせかせせる粗き雨

味代子

更衣はずせぬマスク疎む日々
コロナ禍や逢いたき人よ五月闇

弘子

